

# アリストテレス『ニコマコス倫理学』 におけるアクラシアー論

津 田 徹

## 1 はじめに<sup>(1)</sup>

人は自らのなす行為が悪であると知りつつ、なぜそれをなすのか。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七巻においてこの問題を検討する。無抑制と訳される古代ギリシア語のアクラシアーは、否定接頭語の「ア」が付加された合成語であることから理解できるとおり、エンクラテイアを前提としている。エンクラテイアとは、「抑制」と訳され、ソープロシュネー（節制）とともに、善き物事、称賛すべき物事のうちに含まれる（cf. *EN* 1145 b 8–9）。本稿においては、『ニコマコス倫理学』第七巻前半部におけるアクラシアー論を取り上げ、アリストテレスの定義するアクラシアーとは何か、アクラシアーと類似する諸概念とは何であるか、アクラシアーの前提となるエンクラテイア（エンクラテース）とは何かを取り扱い整理することによって、アリストテレスのアクラシアー定義の行方を考察する。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七巻において、ひとの回避すべきものを三つ挙げている。それら三つの回避すべきものとは、カキアー（悪徳）、アクラシアー（無抑制）、テーリオテース（獣性）である（cf. *EN* 1145 a 16–17）。他方、これらと対立する三つの善きものも存在する。それらはアレテー（有徳）、エンクラテイア（忍耐）、ヘー・ヒュペル・ヘーマース・アレテー（超人的有徳）である（*EN* 1145 a 17 sqq）。特にヘー・ヒュペル・ヘーマース・アレテーについては、英雄的なアレテー、神的なアレテーであるとも言わ

れている。同じく『ニコマコス倫理学』第七巻以外の箇所において、アリストテレスは三つの選択すべきものとしてカロン（美）、シュンペローン（益、有用）、ヘーデュ（快）を挙げ、回避すべきものとしてアイスキュロン（醜悪）、ブラベロン（有害）、リュペロン（苦痛）を挙げている（cf. *EN* 1104 b 30–32）。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七巻以外においても、例えば同書第二巻第七章や第三巻第十章においてソープロシュネー（節制）について言及しているが、ソープロシュネーの問題は、当然アクラシアの問題に係っているものであり、よってアクラシア論を考察する場合にも、ソープロシュネーとはなにかについて私たちはまず確認する必要があるであろう。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第二巻第七章において、ソープロシュネーの検討を行っている。ソープロシュネーとは、「節制」と訳されており、快樂と苦痛の中間に位置するものであり、快樂への超過をアコラシア（放埒）、苦痛への不足をアナイステートス（無感覚なる人）としている（*EN* 1107 b 4–8）。同じく『ニコマコス倫理学』第三巻第十章において、ソープロシュネーを「魂の無口ゴスの部分に関わる徳」（*EN* 1117 b 24）であるとし、「諸々の肉体的な快樂にかかわる」（*EN* 1118 a 2）ものであり、「人間以外の諸々の動物に広く共通する快樂（すなわち、奴隷的快樂、獸的快樂）にかかわる」（*EN* 1118 a 23–25）ものであるとしている。

この箇所におけるソープロシュネーとの対比で考えられているのは、アコラストス（放埒）にかかわる快樂である（*EN* 7.8）。それらは「広く諸動物に共通な快樂」（*EN* 1118 b 1）であり、それらすべての快樂は「触覚（ハペー）によって発生し、飲食において、またアフロディテー的な営みにおいて」（*EN* 1118 a 30–31）発生するものであると言われている。

基本的な事柄として、アクラシアとはどのような状態を意味し、どのような種類を数え挙げることができるのかが問題となるであろう。ソクラテスはこの問題に対してアクラシア状態の内実を否定した（*EN* 1145 b 25–26）が、彼が問題としたことはまさにアクラシアの本質であり、知の位相であった。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七巻第二章冒頭において次のように

問うている。「正しい判断をくだしていながら無抑制に陥るということ、このことはいかなる意味なのであろうか、と人は疑問とするであろう。」(EN 1145 b 21-22) 『ニコマコス倫理学』第七巻において、アリストテレスはアクラシアーとして確認できるものには、六つの種類を挙げているが、それらは、一、病によるアクラシアー、二、テューモス(憤激)によるアクラシアー、三、獸性によるアクラシアー、四、プロペティア(性急さ)によるアクラシアー、五、アステネイア(弱さ)によるアクラシアー、六、エピトゥーミア(欲望)によるアクラシアーである。アリストテレスは、獸的なまたは病的なものに基づくアクラシアー(上記の分類における一及び三に該当)は、厳密な意味においてアクラシアーではないとして、これらを検討した後、アクラシアーの議論の範囲を制限する。「無抑制といっても、その或るものはプロペティア(性急さ)であり、その或るものはアステネイア(弱さ)である」(EN 1150 b 19)。プロペティアに基づくアクラシアーは、「落ち着いて思量しなかったが故に、パトス(情念)のまま引きずられる人々」(EN 1150 b 21-22)のことを指す。他方アステネイアに基づくアクラシアーは、「思量はしていてもその思量したところを情念の故に守り通せぬ人々」(EN 1150 b 19-21)のことを指す。以上は上記の分類での四、五に該当する。

続いて、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七巻第六章において、上記の二に該当する「テューモス(憤激)によるアクラシアー」の考察を行う。「テューモスによるアクラシアー」の検討は、「エピトゥーミアによるアクラシアー」(上記分類の六に該当)との比較からなされる。「『憤激によるアクラシアー(アクラシアー・ヘー・トゥー・トュモス)』は、『欲望によるアクラシアー(ヘー・(アクラシアー)・トーン・エピトゥーモーン)』と比較すれば、さほど醜悪なものではない」(EN 1149 a 24-25)。その理由は四つ存在する。その第一の理由は、「『エピトゥーミアによるアクラシアー』がなにかしら『ロゴスを聞く』ものの、しかし『聞き損なう』」(EN 1149 a 26)ことによる。これに対して「『エピトゥーミアによるアクラシアー』は感覚がその対象が快であると告知すれば即座に享樂へと向かう」(cf. EN 1149 a 34

sqj) というものである。第二の理由は、「テューモスによるアクラシアー」が「エピトゥーミアーによるアクラシアー」よりもより自然的であるため、よって同情的であることによる (cf. *EN* 1149 b 4 sqj)。第三の理由は、「いかほどのかしこきひとの心をも盗む甘きささやき」(*EN* 1149 b 17-18) と言われる場合のように、こうした欲望に由来する「エピトゥーミアーによるアクラシアー」は、「テューモスによるアクラシアー」よりも、より不正な、より醜悪なものである (cf. *EN* 1149 b 18-19) のに対して、「テューモスによるアクラシアー」は、策謀的 (エピブロース) ではなく、開豁な性質であることによる (cf. *EN* 1149 b 14-15)。第四の理由は以下のとおりである。怒りのゆえの行動の人は苦を感じるのに対して、侮慢する人の方は快を伴う (*EN* 1149 b 20 sqj)。後者は快を伴うのであるから、欲望によるアクラシアーといえることができる (cf. *EN* 1149 b 20-23)。よってこのアクラシアーは先のアクラシアーよりも恥すべきものである (*EN* 1149 b 23 sqj)。

## 2 「我慢強さ」、「我慢なさ」と、抑制 ならびに無抑制に対する関係

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七卷第四章において、「もともと、『抑制力のある人』とか『我慢強い人』、また『抑制のきかない人』とか『我慢のない人』、これらはいずれも快楽ならびに苦痛に関係するものであって、このことは明瞭であろう」と述べ、アクラシアー論が快楽、苦痛といった側面から考察されるべきであることを示唆している (cf. *EN* 1147 b 21-23)。アリストテレスはこの快楽の概念を分類する (cf. *EN* 1147 b 23 sqj. *EN* 1149 b 27-30)。ここでは快楽を三つに分類している代表的な文脈を確認しておく。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第七卷第六章において、快楽を、一、人間の自然本性的なもの、二、獣的なもの、三、肉体的欠陥や疾患によるものの三つに区別している (cf. *EN* 1149 b 27-30)。それらのうち、節制 (ソープロシューネー) と放埒 (アコラシアー) は最初のもののみにかかわ

ると述べている。この時点においてこれら二つが関わる快樂が限定される。獸的なものが何ゆえ問題にならないのかといえは、そもそも獸類は悪しき人間とは異なり、魂における優れた部分を所有していないことによるのであり、また我々は獸類をしてこれを節制的である、放埒であるとは言わないのである (cf. *EN* 1149 b 31-32, *EN* 1150 a 2-3)。そうして諸欲求を満たすことで成立する人間の自然本性上の快樂に関する限りでのアクラシアー論の発生について議論の焦点が絞られる。

さて、アリストテレスは、「触覚および味覚に基づく快樂と苦痛、そしてこうした快苦に対する欲情と忌避」(*EN* 1150 a 9-10) について、四つのヘクシス(状態・様態)を説明する。つまり、四つのヘクシスとは、アクラテース(抑制力のない人)、エンクラテース(抑制力のある人)、マラコス(我慢のないひと)、カルテリコス(我慢強い人)のことである。アクラテースは快樂に負ける人のことであり、エンクラテースは快樂に打ち勝つ人のことである。他方、苦痛にかんして負ける人はマラコスであり、打ち勝つ人はカルテリコスと言われる (cf. *EN* 1150 a 13-15)。そして「多くの人々のヘクシスは両者の中間であるが、むしろより悪しき状態の側に傾いているであろう」(*EN* 1150 a 15-16)と大多数の人間の恒常性を指摘している。またアクラテースは、「ある『より以上』のゆえに、またいまいうような人はある『より以下』のゆえに、理を遵守しない人である」(*EN* 1151 b 24 sqq)とも言われている。『ニコマコス倫理学』第七卷第十章においても、同じく以下の如くアクラテースの規定が述べられている。

アクラテースは、そんなわけで、認識を持ちかつこの認識を働かせているところの人の知っているのと同じ意味において知っているとはいえない人なのであり、彼はむしろ睡眠中の人や酔漢のような仕方知っているにすぎないのである。そして、彼はみずから招いて悪しきことをなしているのである<sup>(2)</sup>が、(というのは彼は自分のなすところのものをも、またその目的とするところを何らかの仕方知っているのだから、) それでいてしかし、彼はやはり悪しき人であるわけではない。彼の選択は、よい<sup>(3)</sup>のであるから。

よって、彼は半ば悪しき人（ヘーミポネーロス）なのである（*EN* 1152 a 14-18）。

### 3 アコラストスとアクラテース

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第七卷第八章において、アコラストス（放埒な人）について考察する。この考察は、アコラストスとアクラテースとの比較を通じて行われる。アコラストスは、後悔することのない人であり、自覚のない、持久的な邪悪であって、癒しえない人である（cf. *EN* 1150 b 30-36）。また第七卷第七章において、「それゆえ、諸々の快適な物事の超過を、ないしはそうした快適なものごとを超過的な仕方です、それも選択に基づいて、もっぱら快樂それ自身のゆえに（すなわち派生的なもののゆえにではなく）追求する人がアコラストスである」と述べている（*EN* 1150 a 19-21）。他方、アクラテースは、後悔することを知っており、自覚を伴っており、持久的ならぬ邪悪であって、癒し得る人である（cf. *EN* 1150 b 29-36）。その限りにおいて、先の考察からも明らかのように「エピチューミアーによるアクラシアー」は「テューモスによるアクラシアー」と比較した場合に、確かに劣悪であるが、自覚を伴っており、癒し得る人と言えるのである。

アリストテレスはアコラストスとカキアー（悪徳）をいわば同類のものと考え、以降、悪徳論として議論を進行させている。他方、アクラシアーはカキアーと同一ではない（*EN* 1151 a 5-6）。両者のいずれもが回避すべきものとしてアリストテレスの念頭におかれているが、それらの意味内容が異なっている。一方の、悪徳と同一視されたアコラストスは、超過を自らの快樂のために自身の選択に基づいて追求する人物であって、道徳的観点から言えば後悔することのない人物のことであって、よって自覚を伴わない、恒常的な邪悪であるがゆえに、非常に深刻な悪徳なる人であることが判明する。このアコラスト斯的悪徳について、アリストテレスは、その対応策や対処の仕方を講ずるようなことは、少なくともこのテキスト箇所においてなしていない。他方アクラテース

スの方は、アコラストスと比較して、快樂に負ける（cf. *EN* 1150 a 13–15）ものの、自覚を伴っており、なによりもまず後悔することを知っている人物なのである（cf. *EN* 1150 b 30–36）。アリストテレスのアクラテースの取り扱いをめぐっては、彼が後悔することを知ってはいるが、しかし快樂に負ける人のことであって、悪しき人ではないと述べているがゆえに、アリストテレスにとっては珍しく不明瞭な定義づけとなっており、中途半端な取り扱いの印象の感を否定できない。今一つ、もう一步踏み込んだアクラシアーの定義付けをテキストにおいて期待したいところであるが、しかしアコラストスと比較してアクラテースに更生の余地や改善の可能性を見いだすことができるのである。

#### 4 エンクラテースとイスキューログノーモン、ソープローン

以上においては、アクラシアーに関連する諸々の悪徳、すなわち負の局面について確認してきたが、これより、それらの悪徳が前提とする有徳、すなわちエンクラテースとそれに類似する事柄について確認してゆく。まずはエンクラテース（抑制力ある人）とはどういった人であるかを確認しておきたい。アリストテレスの探究は、それと似て非なるイスキューログノーモン（強情っぱり）ならびにソープローン（節制ある人）とはどういう人であるのかとの比較・検討を通じて開始されているが、エンクラテースとは「本来的にいえば、真なる理とか正しき選択とかを、遵守する人」（cf. *EN* 1151 a 34–35）のことであり、「理を離れることなき人」（cf. *EN* 1145 b 13 sqq）、「肉体的な諸々の快樂のゆえに理に背いて行為することなき人」（*EN* 1151 a 35–36）であると言われている。エンクラテースと類似した人として、イスキューログノーモン（強情っぱり）と呼ばれる種類の人が存在する。アリストテレスは、後者を「説得を受付けず容易に確信を翻すことなき人」（*EN* 1151 b 5–6）と規定し、「エンクラテースが動かされないというのは、情念や欲情によって動かされないということにほかならない。説得に対して彼は、時と場合によってはかならずしも無反応ではないのだからである」（*EN* 1151 b 8–10）と述べているのに

対して、イスキューログノームーン（強情っ張りの人々）は、「理によって動かされることのない人々である」（cf. *EN* 1151 b 10–11）と述べている。

以上においては、エンクラテースとアクラテース、そしてそれらにかかわる諸々のヘクシスを簡単に確認してきたが、エンクラテース（抑制的な人）とソープローン（節制的な人）との相違についてここからは問題となろう。エンクラテースは「諸々の悪しき欲情を有しているにもかかわらず、快ゆえに理に背いて行為することのない人」であるのに対して、ソープローンは「悪しき欲情を有していないがゆえに、行為することはない人」である（*EN* 151 b 34–1152 a 2）。これらの概念はしばしば類同化され徹底して峻別化されてこなかったが、自らの確信でもって後者であり続けた人物がソクラテスであったことは周知の通りである。それ故ソクラテス的な理想的人間観は非常に厳格であると言われているのである。他方アリストテレスのここでの議論は、彼が反ヘドニストに対して些か距離を取ってアクラシアーを眺めているように、ソクラテスに比してさほど厳格なものではなく、むしろ実際的ないし現実的な議論をなしていると言えるのである。

## 5 アリストテレスの探究の方法

アリストテレスのアクラシアー問題に対する探究方法は、アリストテレスの固有の方法とも言われているパイノメナ（諸見解）を取り上げ、そこに含まれているアポリアーを取り上げ説明する演繹的方法のことである（cf. *EN* 1145 b 2 sqq.）。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第七巻第二章において六つのパイノメナを提起する。これらのパイノメナは同書第七巻第三巻を構成する三つの主たる問題へと収斂する。

- (1) 「まず最初に我々の考察すべきは、彼らはその不可なるを知りつつなし  
ているのであるかどうか、ならびにまた、知りつつこれをなすという場  
合の『知りつつ』とはいかなる意味においてかということである」（*EN*  
1146 b 8–9）

(2)「『エンクラテース』あるいは『アクラテース』はどういったものにかかわるとみるべきであろうか」(EN 1146 b 9–10)

(3)「『エンクラテース』と『カルテリコス』は同一の人であるのか、あるいは異なるのであろうか」(EN 1146 b 11–12)

これらの問いに対して四つの解決方法が提示されるわけであるが、(2)の問いは先のテキストの確認から解決できる。エンクラテースは快樂に対して打ち勝つ人の事であるのに対して、アクラテースは快樂に対して負けるひとのことであるが故に、その相違は歴然としている。すなわち両者はいずれも快樂に関係し、知りつつ快樂によって打ち負かされる状態がアクラシアーの状態なのである。(3)の問いについても、エンクラテースは快樂に打ち勝つ人の事であるのに対して、カルテリコスは、苦痛に打ち勝つ人のことであることが先の確認から明らかである。

ところで(1)の問いは従来、ソクラテスによっても同様の事が問われ、ソクラテスはアクラシアー否定の立場を取った (cf. EN 1145 b 23–24) が、いまだアクラシアー成立の条件は明らかではない。またアリストテレス自身もこの問題については、完全に説明を成し遂げているとは言いがたい。この問題に対してアリストテレスは以下の四つの解決方法を提案する。即ち 認識している (エピスタスタイ) の二分類、三段論法、可能態・現実態の区別、三段論法の再考 (実践的三段論法の導入) である。最初に、「認識している」の二段階の区別、あるいは可能態と現実態の区別がなされる (解決 と解決 )。これは人が行為に際して正しいと知らなかったとしても、心のどこかに正しい知をもっているなら、無抑制は可能となるというものである。ちょうど、正しき知をもつ眠った人、同様の泥酔の人などの事例がそれに該当する。アクラシアーの知の状況は、現実性 (アリストテレス流に言えば現実態) を除去された可能的知のことである。また、行為を構成するとされる大前提と小前提のうち、小前提の認知的欠陥によりアクラシアーが可能である (結論の発生) とも論じられている (解決 と解決 )<sup>4)</sup>。よって、正しい知の所有と正しい行為の不履行が同一人物で可能となるというのである (アクラシアーの発

生入)

さてアリストテレスのアクラシアーに対する読者への情報提示の仕方について考えて見よう。アリストテレスは議論の手掛かりとしてソクラテスのアクラシアー否定の立場を検討し、それを最終的には厳密な仕方ではないにせよ受け継いでいる点を私たちは確認することができる<sup>(5)</sup>。この問題は同書第七巻第十章においてアクラシアーの問題にプロニモス（知慮ある人）を導入することで一応解消される。すなわちプロニモスはアクラシアーと相いれない。「人は単に知っていることによって知慮ある人たるのではなく、それを実践しうる人たることによって知慮ある人なのである」(EN 1152 a 8-9)。このアリストテレスの明言によってさまざまな欲望をもつ人のうちで、プロニモスのみがアクラシアーとは無関係であり、決して快樂や欲望に屈することのない人が出現する。この概念をアリストテレスが提出することによって、アリストテレスの立場はソクラテスのアクラシアー否定の立場から進歩していないと言えなくはないか。従来からアリストテレスのアクラシアー論が（理性的欲求と欲望との）道徳的葛藤に由来するものであるのか、あるいは無知（知の欠如）に由来するものであるのかが議論されてきたが、プロニモスを登場させることによって完全なる知を表出させ、他方でアクラシアーを可とする知をも提出してしまった、アリストテレス的知に対してこういった振幅をアリストテレスが容認していることは、彼のアクラシアー論をかえって見えなくさせるものであり、この点にアリストテレスのアクラシアー論に対する議論の不十分さが見られると思われる。更なるこれらの諸問題の検討については、今後の課題としたい。

注

- (1) 使用テキストは、Bywater 校訂による *Aristotelis Ethica Nicomachea*. Oxford. U. P. 1894 を使用し、翻訳は、高田三郎訳、『ニコマコス倫理学』上下巻、1971、1973年、岩波書店を使用、参考にさせていただいた。アリストテレスの著作の引用に当たっては、Liddle & Scott. (ed.), *Greek-English Lexicon*. Oxford. U. P., 1968. の略記に従い、『ニコマコス倫理学』については EN と略す。また引用箇所については、慣例通り、ベルリン・アカデミー版アリストテレス全集のページ数を記す。

- (2) バーネットは、エピトゥーミアーによるアクラシアーが、不随意だという説をすでにアリストテレスは否定していると解しているが、知と悪の併存関係がそこに随意という自発的原理を加えることによって、その特徴を更に浮き彫りにさせている (Burnet. J., *The Ethics of Aristotle*. Arno. 1973, p. 328)。しかし、エピトゥーミアーによるアクラシアーは、随意的に悪をなし、後悔するのを知っていると示されてはいるが (cf. *EN* 1150 b 29–36, *EN* 1152 a 14–18), 『ニコマコス倫理学』第三巻においては、随意的行為は賞賛ないし非難の対象であると言われ、むしろ後悔は、不随意的行為の方に伴うと示されおり (cf. *EN* 1109 b 30 sqq), 議論内容が一貫してない点は否定できない。
- (3) この箇所における選択がよいとは、どのような意味であるのか。アクラシアーの一面を示すものとして興味深いが、アクラシアー発生条件として、個別の事情に即した選択そのものの機能 (三段論法における小前提) が無関係であることを証明するものとも理解でき、当惑せざるをえない。なお、アスパシオス (A. D. 2 C 初めの注釈家) もこの用語が厄介だと気づいており、スチュワートも、この用語にかんする若干の混乱が存在しているとコメントしている (cf. Stewart. J. A., *Notes on the Nicomachean Ethics*. Oxford. U. P., 1872, vol. 2, p. 215)。
- (4) 但しこの解釈も厳密には満足のゆくものとは言えない。なぜなら、この解釈だと小前提の認知的欠陥によるアクラシアー以外のアクラシアーの事例というものを除外してしまうからである。また小前提の認知的欠陥とは単なる誤りの故の行為とどう区別されるのか不明瞭である。よって、私としては、アクラシアーの条件を小前提の認知的欠陥に求めようとする解釈には反対である。また、アリストテレスの例示するアクラテースの有する大前提そのものも、アクラテースの欲望の表明となっている点があげられ課題を残す形となっている点も指摘しておきたい。
- (5) 『ニコマコス倫理学』第七巻第三章が非アリストテレス的であるとする見解は、古くは Cook Wilson, Walsh などによって指摘された点である (cf. Walsh. J. J., *Aristotle's Conception of Moral Weakness*. Columbia, 1960, p. 60)。